

シンポジウムの総括

自殺総合対策推進センター・地域連携推進室室長 反町吉秀

皆さま、お疲れ様です。最後に少しお時間をいただきます。自殺総合対策推進センターの反町です。もともと私、法医学者を15年やっております、その時に中学生3人の自殺を体験してしまいました。

総括的に皆様のお話を聞いて、最後に良かったところや課題をまとめたいと思います。

まず井門先生からの今回のシンポジウム、命の教育の趣旨についてのお話がありましたがその中で少し私が注目しましたのが自殺を消費させる社会環境・教育環境、学校組織、教師の在り方を通して、問題を解決することが、教育実践研究の根幹であると言われて、このプロジェクトのお話をされました。

次に本橋センター長の講演ですけれども、新しく自殺対策のシステム、学校性格的な視点、あるいは政策的な視点からの話だったと思います。今日は学校の先生方が多いように見えますが、こういう政策的な話を聞かれる機会は意外に少ないかもしれませんが、新しい視点が提示されたのではないかと思います。省庁の鍋岡さんから、政策的な視点ということで話をされましたがその中で、文部科学省もこれまでやってこられた政策の検証が必要じゃないかということで、お手元の資料にもあるとは思いますが、スクールカウンセラーの事業もかなり増えてきているんですけども、なんでそれが自殺率の減少につながらないのだろうということ、非常勤の問題とかいくつか受け止める大人が地域にいるかとかSOSを受け入れる、全職員に理解する職体制があるかどうかですね、問題提起をされたと思います。

それから、SOSの出し方教育、これはまだ学習指導要領にも書かれていないんですね、これを本格的に全国でちゃんとやるためには、書いていかなければならないと思われるわけですが、そのことの指摘、ただ、自殺対策基本法には、ちゃんと17条によるSOSの出し方教育を学校でやりなさいと書いてあるということの指摘がありました。それから、文科省についても問題提起がありました。

それから、どこの場でやるかということに対して、今日はもう学校での話を中心だったのですが、学校だけの話でSOSの出し方を伝えるのではなく、地域の場を、ね、そういう

ところも違ってくるところです。それから、これは学問的なところなのですが、ヨーロッパで行われた、大規模な、子どもに対する自殺予防教育の研究についてですね、指摘がありまして、統計学的に効果があったのは子どもに対する自尊感情の向上とSOSの出し方教育が一番効果があったという説明をして、はい。

次に、シンポジウムの演者の方々のお話に移りたいと思いますが、まず安川先生のほうから、これまで自殺予防教育を教員の方々にされてきたのですが、子どもにやるとなると、まあ結構大変だ。まずあの、やりやすいところという、レジリエンス教育とかストレスマネジメントのところはやりやすいんじゃないかというような話から始まってですね、各演者の方々のお話にも伝わってですね。

まず最初に、北海道の深川保健所の今川さんの方から、北海道における学校の先生たちを対象にした自殺予防教育、ゲートキーパー研修、これは平成24年度からそこに植え込みでやったのは全国的にも非常に先進的な取り組みでしたよね。その中で阪中先生はじめ、安川先生はじめ、様々な方と出会いがある中で、手作りで、実りがあったことも、詳しく丁寧にですね、ご説明いただいたと思います。

そして次に、上島先生からレジリエンス教育のお話をいただきましたけれども、非常に、まずレジリエン

スってどういうものかわかりやすく話をしていただいたうえで、具体的な教材をメインにですね、非常に子どもたちに伝わるんじゃないかなという、実りある教材の事例をたくさん紹介していただきました。大変勉強になりました。

そして、吉川様からストレスマネジメント教育についてお話をいただきまして、非常に私もびっくりしたのですが、養護教員の先生が中心となってこれだけすべての学年でステージを考えて組織しているということです。今日養護教員の方もたくさんいらっしゃるということで、今後の自殺教育は明るいと考えさせていただきました。

最後に阪中先生の方から、まあずっと20年来取り組んでこられた、子どもに向き合う自殺予防教育の実践と、あとは政策的な視点からの話をしてくださいました。その中で、私は重要な指摘があったと思いますが、子どもが自殺率がどんどん上がってきってしまうなかに社会の在り方や仕組みが変わってしまっていて、人間的なつながりがいろいろなところで途絶えてしまうところを最初にご指摘になったうえで、お話をされたところに非常に注目をさせていただきました。そして、そのあとの対話の中で、重要なポイントが阪中先生から各先生方に質問していただけたと思います。そこは蒸し返す必要はないかなと思います。

今日非常に新しい取り組みだったので、いろいろな点が新しく、ひとつはこういう政策的な話と現場の方々の実践的な話と、両方一緒に話をして議論をしたということは全国的にもあまりない取り組みかと思います。今後ですね、今日ご紹介があったような **good practice** を全国に展開していくためにはこういう議論が非常に必要で、今日はその始まりにしていければ、いろいろと考え方の違うところもあったかもしれませんが、お互いいろいろな学びがありますので、ぜひそういう新しいスタート、それこそ議論の一区切りになったのではないかと思います。それから、ちょっとひとつあるのはちらっと阪中先生と本橋先生が話をされていたのですが、学校だけが **SOS** を出す教育の場ではないかもしれないし、あとはやっぱり学校にも家庭にも居場所がない存在を意識して、地域において居場所づくりをどう進め、地域においてどう **SOS** の出し方を伝えて、そして地域でどう **SOS** を受け止めるのか、学校と地域と、いろいろな意見がありますが、この方々が連携していくこの課題に取り組んでいかななくてはならないということも、皆様の話を聞いて改めて確認しておきたくなりましたので、述べさせていただきます。

以上、雑駁な話ですがまとめとさせていただきます。どうもありがとうございました。

(本稿は、反町先生のお話をテープお越しをしたものです)